

1999-6-17「目黒会報」

電気通信大学-大学教員のロイヤリティ

弓場敏嗣

電気通信大学大学院情報システム学研究科

電気通信大学創立 80 周年記念事業の一つである募金活動が、おおむね所期の目標を達成したのは OB の皆さま方の多大なるご支援の賜物であり、深く感謝しております。大学院情報システム学研究科は設立以来やっと 8 年目を迎えている訳ですので、ちょうど 10 分の 1 の年齢ということになります。21 世紀の電気通信大学は自分達情報システム学研究科がささえるとの気概をもって、本学の発展のため一層の努力を続けていきたいと考えています。

大学教員のロイヤリティ（忠誠心）について書かせていただきます。記念募金は本学へのロイヤリティの表象の一つだと思います。OB の皆さまの多くは、4 年間という、人生全体から見ると短い大学生活を過ごされたことと思います。過ごした期間は 4 年でも、その後に電通大出身者として見る世間の眼と本人の自覚が、自分の卒業した大学へのロイヤリティを育みます。一方、OB を除く一般の大学教員の場合はどうでしょう。就職口の一つとして本学を選び任用された訳ですが、大学全体のためを思っている管理的な仕事をしてほしいと言われても、すぐには引き受ける気持ちにはなれません。研究と教育の時間を削ってまで、個人的にはメリットの少ない大学全体の仕事を引き受けるには抵抗があります。しかし、5 年、10 年と勤続年数がふえ、卒業生が世の中に出ていくにつれて、ロイヤリティは増してくるものようです。

最近、教員の任期制の導入がとり沙汰されています。例えば、助手については、公式、非公式の違いはありますが、5 年間の任期制をしる大学も出てきました。任期を限って大学に勤務する場合、その期間内に自分の個人的業績を上げることが最大の目的となります。個人主義あるいは利己主義が蔓延する結果、帰属する組織へのロイヤリティは育ちません。このように、学生で過ごす 4 年間と任期付の教員として過ごす 5 年間では、大きな違いがあります。その後の人生において背負う看板の大きさの違いなのかも知れません。実はこの点が教員の任期制の最大の問題点だと思っています。

終身雇用や年功序列がなくなり、契約社員が多くなってくると、会社へのロイヤリティの実体も徐々に変わってきているようです。ただ、卒業した大学と家族へのロイヤリティだけは変わらないでほしいと願っています。記念募金を集める事務担当者のご苦勞を身近に見て、感じたことを書かせていただきました。